賢治と「女性」（Ⅱ）

浜　下　昌　宏

〈賢治の禁欲について〉

（1）

賢治にとっての〝初恋〟とおぼしい出来事は、彼が書き残した短歌を証拠とすれば、18才の時のことである[1]。その年（大正3年）、彼は盛岡中学校を3月に卒業した直後の4月に、肥厚性鼻炎手術のために盛岡の岩手病院に入院するが、手術直後の発熱の様子からチフスの疑いもあり、結局5月末にやっと退院する。その入院中に、彼は同い年の看護婦に恋を覚えたらしい。森荘已池がいみじくも〝十秒の恋〟と呼ぶその事情は、次のような歌稿から推測することができる。

検温器の
青びかりの水銀
はてもなくのぼり行くとき
目をつむれり　われ[2]

われひとり
ねむられずねむられず
まよなかの窓にかゝるは
赭焦げの月[3]

われ疾みて
かく見るならず
弦月よ
げに恐ろしきながけしきかな[4)]

まことかの鸚鵡のごとく息かすかに
看護婦たちはねむりけるかな[5)]

目をつぶりチブスの菌と戦へる
わがけなげなる細胞をおもふ[6)]

十秒の碧きひかりの去りたれば
かなしく
われはまた窓に向く[7)]

すこやかに
うるはしきひとよ
病みはてて
わが目黄いろに狐ならずや[8)]

発疹チフスの疑いで病床に就いている18才の賢治には、検温器が熱の下がったことを知らせてくれるよう祈る思いである。ところが、その望みも絶たれ、眠れぬ夜闇の中でただ月の赤い光を不気味に思いつつ眺めるだけである。病軀の惨めさ、たよりなさにありながら、賢治は、病魔に対して自分のために戦ってくれている身体の小さな細胞を愛しく思う余裕を持っている。そして、思いが過敏になり不眠の状態にいる自分への嫌悪感を救ってくれるのは，その時別室で健やかに眠っているはずの看護婦たちへの思いである。やがて、賢治の思

いは、そのうちのひとりに特定される。すなわち、彼の片恋の相手とは、彼の脈膊を数えるために「十秒」だけ彼の手を握る女性であった[9]。そのはかなさは、しかし「碧きひかり」の時でもある。そして恋する者の常として、病身の我が身が相手に醜く映っていないかと懸念する程である。

しかし、この恋は実らない。賢治は結婚すらも考えたらしい。若いという理由で父母から反対され、賢治は次のような歌を残しながら、この恋を断念していく。

きみ恋ひて
くもくらき日を
あひつぎて
道化祭の山車は行きたり[10]

君がかた
見んとて立ちぬこの高地
雲のたちまひ　雨とならしを[11]

この初恋以降、たしかに賢治には結婚を考えた女性もいたようであるが[12]、我々の関心を惹くのは、それ以降の彼の一貫した禁欲の姿勢である。むろん我々は、「人間は、もっともっと生き物として、木や草やとりやけだものと一緒に見られてよいと思う。性行為なども人体生理の調整上、どうしてもなくてはならない自然の行為で、これをいやしめるのは、もっとも悪い思想だ[13]」という賢治の言葉や、また、「禁欲は、けっきょく何にもなりませんでしたよ[14]」と彼が語ったことを伝え知っている。彼の禁欲観も興味深い論点ではある。しかし、何ゆえに彼が禁欲に耐え、持続し得たかについてのひとつの考察を、本稿の課題にしたいと思う。

(2)

賢治における禁欲への志向は、(賢治への悪しき導入の役割を果たし続けてきた)遍く人口に膾炙している「雨ニモマケズ[15]」の思想に、端的にうかがい知ることができる。この詩の中で、賢治は「慾ハナク」と愚直に明記し、「一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベ」と歌っている。まず、食に対する禁欲の姿勢が彼には顕著である。間断なく襲ってくる飢饉の惨状を目の当りにして、『グスコーブドリの伝記[16]』に描かれているような、苦吟する同郷人への献身こそが賢治の選択した道であって、とても美食などへの欲望はかけらも見せはしない。また、『ビヂテリアン大祭[17]』では、ユーモラスな語り口で展開しながら、菜食が肉食否定の立場からと栄養学の立場からと対比されながら称揚されている。

彼は自ら菜食生活を実践していた。友人の関登久也は次のようなエピソードを記している。「大正7年稗貫郡〔現在の花巻市――引用者註〕下の土性調査を嘱託された頃、菜食生活を始め爾後5、6年は継続実行されました。(中略)菜食は短期間でない為お母さんや、妹さん方が陰ながらどんなに賢治を心配されたか、どうかして充分の栄養を摂らせたいと、天ぷらとか、胡桃とか脂肪の多い食品を作って、賢治に食べさせる様に苦心してをられました[18]」。また、晩年、大正15年より始めた羅須地人協会の活動の際には、実家の別宅で独居自炊の生活をするのであるが、賢治の食事は「冷たい御飯に納豆をかけて食べたり、全く漬物と御飯位[19]」であったという。

尤も、賢治が示した食に対する禁欲、粗食や菜食は、『ビヂテリアン大祭』で論じられているような宗教的・栄養学的考慮による意志に基づく面のみならず、賢治の生得の性質に由る面も多分にあるであろう。弟の清六の回想によれば[20]、賢治は「小さいときから何とも哀しいものをもっており、父は『前生に永い間諸国を巡礼して歩いた宿習がある』と言った」そうであり、「家族と食事をするときにも恥ずかしがって恐縮するように食べ、噛むときにも音をたてないようにした」とのことである。

実際、そもそも食にはどこか卑しいところがある。人間の内にある動物性をあからさまにするからであろうか。自分の自由となった餌を貪欲に食することは、ある種支配者・覇者の傲慢を思わせる。その意味では、食に対する控え目な態度は、他者を自分の糧とはしない謙虚な生や、自分のための犠牲を潔しとしない美しい生への志向を示していると言うこともできる。

とまれ、賢治の食には美食を思わせるものが全くないのであろうか。「帆立貝入りのスキトン」などは、賢治にふさわしい御馳走ではないのか。しかし、「停留所にてスキトンを喫す」と題された、1928年7月20日の日付がついている詩の中に出てくる「帆立貝入りのスキトン」は、次のような文脈の中に置かれているのである。

わざわざここまで追ひかけて
せっかく君がもって来てくれた
帆立貝入りのスキトンではあるが
どうもぼくにはかなりな熱があるらしく
この玻璃製の停留所も
なんだか雲のなかのやう
そこでやっぱり雲でもたべてゐるやうなのだ[21]
(後略)

(3)

賢治はある時、どんな女が好きかと訊かれて、「カスリの着物にモンペで、蛇の目傘をさしているような娘を好きだ[22]」と言ったことがあるらしい。この言葉だけでは、賢治の好ましい女性像を具体的にイメージするのは困難である。「ひとえ物一枚をきちんと美しく着こなせる女はめったにない[23]」とも言っていたようであるから、「カスリの着物にモンペ」云々という言い方は、着こなしの巧みさを意味しているのであろうか。それとも、農村の生活にふさわしい、活

動的な質実さを備えた女性像でも意味しているのであろうか。いずれにしても、風采について言挙げして、女性の好ましい性格や内面について語らない点が興味深い。また、彼が〈misogynist〉などではなかったことも確かであろう[24]。それどころか、賢治が「仲々しっかりした人だ[25]」と評した女性がいたのである。

その女性は、羅須地人協会の賢治をしばしば訪れて、彼もとうとう応対に困ったらしい[26]。小学校の教師であった彼女は、彼女の職場に講話に来た賢治を見て、何か惹かれるものを感じたのであろう。当時、彼女は賢治より十才以上も離れた22か23才の、生気あふれた女性であり、賢治を訪れるたびに花やお菓子を持参し、またひとり暮しの賢治の不便に、家の中を小ぎれいにするというような家庭的配慮も示したようである。賢治の方もまた、彼女に対して「しっかりした人」という感想をもらし、好感を抱いていたことはまちがいない。

ところが、その女性の情熱を、ついには賢治は拒むのである。「『本日不在』といふ貼紙を貼って置いたり、或ひは別な部屋にかくれて、なるべく逢はないやうにしたりしてゐたのですが、さうすればする程いよいよ拍車をかけてくるので、しまひには賢治も怒ってしまひ、その女の人に辛くあたった様です[27]」。こうして、賢治は改めて単身であることを選ぶ。その理由は臆測するしかない。実際、彼が記すように「私の愛情は特定の一人の人をとくに定めて愛するものではない[28]」からなのであろうか。

賢治の性愛は結婚という形では結局実を結ぶことがなかった。しかし、性欲の試練は賢治を襲う。次のような凄絶なエピソードが伝えられている。賢治30才頃のことである。「或る朝、館の役場の前の角で旅装の賢治に会いました。〈……〉顔が紅潮して如何にも潑溂とした面持でした。どちらへおいでになったのですか、ときくと岩手郡の外山牧場へ行って来ました。昨日の夕方出かけて行って、一晩中牧場を歩き、今帰った所です。性欲の苦しみはなみたいていではありませんね。さういって別れました[29]」。また、彼の教え子は、禁欲のため

であったろうと推測して、次のような賢治を観察している。「風呂には入らず、いつも冷水をかぶっておられました[30]」。このような禁欲の苦行の一方で、1921年8月11日付の関徳弥宛の手紙では、「私の感情があまり冬のやうな工合になってしまって燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので」、そのために「一人の心をも理解し兼ねる[31]」という恐れから3週間ほど肉食を試み、その結果、脚気にかかったことが記されている。まこと賢治は修羅の人であった。

(4)

上述の関徳弥宛の手紙が書かれたのは、賢治が家を出奔して上京し、国柱会を訪れて勤労奉仕をし、かたわらでひと月に3,000枚も書いたという伝説がある程に法華経信仰のための創作童話に打ち込んでいた時期である。手紙が書かれた直後の8月中旬に、妹トシの病気の知らせに、原稿で一杯の大きなトランクをさげて花巻に戻るのであるが、膨大な原稿の山を見て驚く弟清六に、賢治は「ワラシ(子供)こさえるかわりに書いたのだもな[32]」と言ったという。

たしかに、賢治は「その欲情の悉くを芸術の殿堂に美の華と咲かせ[33]」たと言ってもよい。「性欲を、どのように上手に芸術までたかめられたかということは、人間や芸術をはかる、判断の一つのものさしになるのだ[34]」と賢治は言ったという。

しかし、彼の禁欲は芸術へと昇華されるだけではない。「大きくいへば深い人類愛の念願を持って、一生を終始したかった賢治の深く高い念願の発露[35]」と解しても決して誇張ではない。要するに、苦行僧のごとく不犯の戒律を自らに課した賢治の一生は、宗教的信念に貫ぬかれた菩薩を思わせる。しかし、菩薩ではないことは賢治自らが自覚しており、それゆえに「おれはひとりの修羅なのだ[36]」と叫んでいるのである。彼が「修羅」であった最大の証拠は、彼の阿鼻叫喚の数々、すなわち詩歌の作品群である。その意味で、賢治における禁欲の原理を、我々は、宗教者賢治のうちにではなく、詩人賢治のうちに改めて求め

てみたい。

(5)

宮沢賢治研究史のひとつの金字塔とも言える『宮沢賢治語彙辞典』(原子朗編著、東京書籍、1989)には、残念ながら「禁欲」の項目はない。実際のところ、彼の作品の中から「禁欲」という語を収集しようとすれば、かなり困難であろう。とはいうものの、印象的な使われ方が「雲の信号」という詩に見られる。

〈雲の信号[37]〉

あゝいゝな　せいせいするな
風が吹くし
農具はぴかぴか光つてゐるし
山はぼんやり
岩頸(がんけい)だつて岩鐘(がんしょう)だつて
みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ
　そのとき雲の信号は
　もう青白い春の
　禁慾のそら高く掲げられてゐた
山はぼんやり
きつと四本杉には
今夜は雁もおりてくる

「禁慾のそら」という形容が心を打つ。言うまでもなく「そら(=空)」は自然の光景であり、それに対して「禁欲」は人の営みである。ここの表現は擬人法ではあるまい。むしろ、自然の点景に、作者賢治の感情が射影されていると見るべきであろう。最初から6行目までと、終りの3行は、のどかな光景のスケッチであり、晴朗ともいえる作者の心持ちが表れている。それらの部分の

トーンは、2字下げて記されている7行目〜9行目とは対照的である。後者の部分は、屈折した心情を推測させる。「禁慾のそら」と並んで、「雲の信号」、「青白い春」という語法が、他の部分には見られないものであり特異である。つまり、自分の中の確固としては捉え難い、何か曖昧で暗いものを、自然を介して読み取ろうとする態度をうかがわせる。「雲の信号」の「信号」とは、仮に英訳するならば〈sign〉〈signal〉ではなく、〈omen〉を当ててみたい。自分のひきずっている運命の予兆を雲のうちに求めようとしているのであろう。「雲」「青白い」「そら」等は、賢治独特の透明感・清澄感へと読む者を誘ってくれるが、しかし、その清々しさは心の緊張に支えられていることを看過してはならない。たしかに、賢治は自然を謳う。時としてきわめておおらかに、である。ところが、そこには充全な解放感はない。自然のゆたかな抱擁力が、賢治の感受性の最前線においてせめぎ合い、わずかに均衡を保っている状態こそが、このような詩において記されているのである。従って、少なくとも「雲の信号」における「禁欲」とは、苦行僧的禁欲ではなく、ぴんと危く張りつめている賢治の感性のあり様を指しているのではあるまいか。

「恋愛」や「性欲」という表現がそのまま使われている詩もないわけではない。例えば「小岩井農場　パート九」には次のような一節がある。

もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といつしょに
至上福祉にいたろうとする
それをある宗教情操とするならば
そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしょに行かうとする
この変態を恋愛といふ
そしてどこまでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を
むりにごまかし求め得ようとする
この傾向を性欲といふ[38]

以上の詩句は、いささか説教調を帯びているが、我々が傍点を付した「宗教情操」「恋愛」そして「性欲」が、退嬰への過程であることを明記している。その限りでは、宗教者賢治の面目躍如たる一文と言ってもよいが、散文調の文体の背後に読み取り得る賢治の心情は、先に引いた「雲の信号」とは明らかに異なる。その点の論究は本稿の範囲外であろう。むしろ我々は、「禁欲」「恋愛」「性欲」等の語法は見られないものの、「春光呪詛」という詩に注目してみたい。

〈春光呪詛[39]〉
いつたいそいつはなんのざまだ
どういふことかわかつてゐるか
髪がくろくてながく
しんとくちをつぐむ
ただそれつきりのことだ
　春は草穂に呆(ぼう)け
　うつくしさは消えるぞ
　　(ここは蒼ぐろくてがらんとしたものだ)
頬がうすあかく瞳の茶いろ
ただそれつきりのことだ
　　(おおこのにがさ青さつめたさ)

感情の吐露の激しさが際立っている詩ではあるが、「呪詛」という表題が示唆しているように冷静な自己内省が言葉に形象化されており、またさらに、対象を直視して記述的に描写する、精神の強さ・健常さも示されている。

1行目〜2行目の 「いつたいそいつはなんのざまだ/どういふことかわかつてゐるか」という罵倒から始まるトーンの高さは、読む者には事情の不明ということもあって、ただただ作者の感情の激しさを思わせる。しかし、3行目〜4行目は一転して、「髪がくろくてながく/しんとくちをつぐむ」と記述的な表現がなされ、9行目の「頬がうすあかく瞳の茶いろ」と相俟って、明らかにある女性像が示唆されている。表題の「春光」及び6行目に出てくる「春」は、それぞれ淡い恋心、そして劣情を含意しているようである。その欲望を抑え禁じようとする心が、5行目そして10行目に反復される「ただそれつきりのことだ」という詩句によって表現されている。「髪がくろくてながく/しんとくちをつぐむ」と「頬がうすあかく瞳の茶いろ」とは、必ずしも評価文とは言えないとしても、少なくとも対象を貶しめている言葉ではなく、客観的記述のうちに作者の心が対象に惹かれていることが理解できる。すでにそのような記述の仕方が、感情を抑えている証しである。6行目〜7行目と2字下げて書かれ、さらに8行目は4字、最終行は7字と、順次下げられていく。これは、作者の内省と自己への沈潜の度合が深まっていくことを、賢治式〈poème concret〉によって表していると考えることができよう。その部分の8行目「蒼ぐろくてがらん」、そして最終行の「にがさ青さつめたさ」という詩句は、「ただそれつきりのことだ」と自分に確認・納得させた決断が、内面の心象風景として結晶していることを表している。すると、「呪詛」とはつまるところ自分に対する呪詛なのであろうか。

我々は「春光呪詛」という詩に、賢治の恋心と欲情、そして禁欲の姿勢を読み取ってみたいと思う[40]。この詩には、自分にも捉え難く、制御し難いある情動の発揚と、一方でそれを断念し抑えようとする潔癖な賢治の気持の対比と緊張が表現されている。これもまた「禁欲」と呼んでよいならば、そのような緊張は、対象に身を委ねることを拒み自分の感受性の枠内で自らを保持しようとする、詩人賢治の禁欲を意味しているのではあるまいか。

(6)

感ずる力は詩人には不可欠のものであるが、賢治はその力の鋭さを天性とし、感受性が身を滅ぼしかねない危険を自覚していた。それを的確に詩句にしているのは、「青森挽歌」の中の次の一節である。

感ずることのあまり新鮮すぎるとき
それをがいねん化することは
きちがひにならないための
生物体の一つの自衛作用だけれども
いつでもまもつてばかりゐてはいけない[41]

概念化によって、感性の鋭敏な体験あるいは受苦を記号化してしまえば、実際「きちがひ」という生存上の危機は除かれる。しかし、そのために、知性偏重の合理的・効率的生活とひきかえに、感性の活動は限定・拘束され、生の内実は平板なものとなってしまうであろう。それでは、概念化以外に「きちがひ」にならぬための方途はないのか。賢治の場合、そのもうひとつの方法が「禁欲」であったのではあるまいか。つまり我々は、彼の禁欲を宗教的原理に求めるのではなく、それとは別に、感受性もまた禁欲の原理であったことを確かめたいのである。

そもそも感覚の鋭敏さがなにゆえに禁欲の原理となりうるのか。この問いに対して、我々はとりあえず、生理学的な仮説を立てておきたい。

(7)

解剖学者であった三木成夫の説明を借りれば、地球の生物の生体構造は生命の発生の起源の痕跡を留めている。動物のからだは、「最初から宇宙の一部を切り取っておのれの体内に封じ込め、さらに体表に深い入江をつくって、それを体内に誘導する[42]」。動物の体内に封じ込められたものは「体腔」であり、それ

を導くものが「腸腔」であり、前者は性に後者は食に関わり、両者は内臓系を成す。「このなりたちは、動物の食と性がまさに〝内臓された〟宇宙との交流によっておこなわれることを物語る[43]」と解され、「小宇宙」と呼ばれてきたゆえんである。

一方、動物のからだには、さらに、そのような「小宇宙」を、本来の「大宇宙」から仕切る、からだの壁である「体壁系」と呼ばれる器官が形成される。それは、自力栄養能力のない動物が獲物を捕捉するための感覚と運動に関わる。内臓系の代表といえる心臓に対して、体壁系の代表は脳とされるが、体壁系は身近のものにいちいち反応するために場合によっては大宇宙との交流を妨げるひとつの原因となってしまうように、大脳皮質は自然に対する人間の「自閉症」の原因ともなりうる。つまり、「内臓系が『遠』と共振する『植物器官』であるのに対し、体壁系が『近』を感覚する『動物器官』とよばれる[44]」のである。

以上のような三木成夫の説明を、賢治解釈に援用してみたいと思う。すなわち、賢治における感覚の鋭敏さが、自ずと食と性の自然性を抑えてしまったのではないか。体壁系の働きが内臓系の働きを抑えてしまったこと、それは、賢治が感受性の豊かな詩人であるゆえの必然のことがらであろう。

たしかに、三木成夫の説明にあるような、内臓系の方がより「宇宙」と共鳴し合うという生理—宇宙論的な図式の点は、賢治の宇宙的感性を説明するものではない。しかし、それも「宇宙」概念（ないしは「宇宙」への視点）がここでは異なっているにすぎない。つまり、少なくとも賢治的「宇宙」は、食と性によって生理的・物質的・動物的に関わっている宇宙というだけではなく、感性においてもそのリズムを共有している宇宙である。

あるいは、オルダス・ハクスリーがさかんに取り上げた、シェルドン（Sheldon）による人間の三類型を取り上げてみよう[45]。それによれば、消化器系がよく発達している内胚葉型、筋骨がよく発達している中胚葉型、さらに、神経が体表に近いとされている外胚葉型とに分類される。そして、各極の強度

を1～7の目盛りで計り、3～4をバランスのとれた値とするのであるが、ハクスリー自身は、内胚葉が1、中胚葉2、そして外胚葉が7であったといい、イシャウッドは「まれに見る敏感な体質[46]」と評している。神経が体表に近いために感受性が過度に発達するわけである。ここで我々は、ラフカディオ・ハーンが妻のセツに語ったという、「私は感じやすいたちなのだ (I have a very thin skin.)[47] 」という言葉を思い出す。

賢治もまた「皮膚のきわめて薄い」、そのために、生命維持に必要なこと以上に多くを、そして微細なものを感じ取ってしまう体質であった。

(8)

自然を謳う彼の感性は、我々に宇宙への微妙な見方を教えてくれるが、彼はまた、社会における悪意の存在、いわば宇宙の調和を乱すものに対しても敏感である。彼の文学的創作は明治42年、彼が13才の時の短歌から始まっているが、すでにその頃に次のような歌稿を残している。

父よ父よなどて舎監の前にして
かのとき銀の時計を捲きし[48]

藍いろに点などうちし鉛筆を
銀茂よわれはなどほしからん[49]

あざむかれ木村雄治は重曹を
インクの瓶に入れられにけり[50]

このような短歌を読むと、改めて短歌には季語というものがなかったことを知らされる。社会的感情の卒直な表現の中に、賢治の微妙な感性の所在を我々は知る。彼は、13才の時、郷里花巻を出て盛岡中学に入り、そこで寮生活を始

めるのであるが、彼が学校生活において受けた精神的傷痕の数々が歌稿として残されている。たとえば、彼は、寄宿舎の、陰気ではあっても質実で厳粛な雰囲気の中で、それにいたたまれなかったのでもあろう父が、銀時計を懐中から出してネジを捲いた無神経さ、あるいは俗物根性に苛立ちを覚える。あるいは、学友のひとりが鉛筆に傷をつけているのを不快に思い、また、いじめを受けた友への同情の気持を歌に託している。

そのような賢治の感受性は、自然の事物、社会的存在のすべてを含んだ、「生きとし生けるものへの苦悩連帯の犠牲的優しさ[51]」から発している。言い換えれば、虐げられた者、犠牲になった者・抑圧された者の側に、即座に、半ば本能的に立つことのできる感受性である。それは、食や性のための激しい闘いには不向きの感性であろう。

(9)

では、我々が本稿の冒頭に取り上げた、賢治の〝初恋詩篇〟に見られる恋愛感情は、いわば誰にもあるような青春期の一過性の徒花にすぎないものであって、そこに示されている生命感の発露というものは、彼の禁欲の体質とは全く異質の、賢治らしからぬエピソードとでもいうのであろうか。

しかしながら、改めて〝初恋詩篇〟及びその周辺の歌稿を読み直してみると、我々は賢治の感性が若い時から晩年に至るまで一貫してひとつの調子を保っていることを知るのである。まず、以下のような歌を挙げてみよう。

暮れ惑ふ　雪にまろべる犬にさへ
狐の気ありかなしき山ぞ[52]

深み行きてはては底なき淵となる
夕ぐれぞらのふるひかなしも[53]

十月を白き花咲き実となれる
草に降る日のかなしくもあるか[54)]

屋根に来てそらに息せんうごかざる
アルカリいろの雲よかなしも[55)]

石投げなば雨ふるといふうみの面は
あまりに青くかなしかりけり[56)]

以上の歌は明治44年1月以降に書かれた、賢治が15才前後の頃のものである。いずれも、「かなし」という形容ないし詠嘆が印象的である。この「かなし」は、「悲し」であるのか「哀し」であるのかはともかく、歌われている自然気象の率直な感動ないし描写であることをおしとどめ、彼の歌が感性という透明膜の振動のしるしであることを示している。つまり、賢治には、対象との全的な合一を阻む何かがあり、それが彼をして、自然の光景を見つめながら「かなし」と言わせているのではあるまいか。(ここでは、逆に彼の故郷の風土がそのような自然的特性を持つという考え方は保留しておきたい。)

さらに、〝初恋詩篇〟の書かれた大正3年4月頃の歌稿を閲覧してみよう。その中には、先に引いた歌と趣きを同じくする、自然の情景を感性のヴェールで包んだ「かなし」が込められているものがある。

いかに雲の原のかなしさ
あれ草も微風もなべて猩紅の熱[57)]

この歌などは、充全に自然を享受できない苛立ちが伝わってくるようである。「猩紅の熱」は比喩なのか、それとも賢治自身が罹っていたのかはわからない。いずれにしても、抒情に徹しきれない(自)意識の介入がここに見られる。

さらにまた、社会的感情としての「悲しさ」を表している歌もある。

粘膜の
赤きぼろきれ
のどにぶらさがれり
かなしきいさかひを
父とまたする[58]

「粘膜の赤きぼろきれ」とは、扁桃腺でも腫れた病気の状態で口論したという意味なのか、それとも、口汚なくやり合ういたたまれなさをそのように比喩的に表現しているのか。このような問いは、次のような歌には生れてこない。「悲しみ」の感情は明確に自我の中に実体化されている。

ねむそよぎ
しら雲垂るゝ朝の河原
からすのなかにて
われはかなしみ[59]

山上の木にかこまれし神楽殿
鳥どよみなけば
われかなしむも[60]

「かなし」の原因は不明である。もしかするとこれらの歌には説明されていない、何らかの社会的軋轢でもあって、その感情を担ったまま賢治はその場に来たのかも知れない。しかし、証拠のない外的事実を推測などせずに、この歌をのみ読み返してみるならば、その「かなし」は、自然の情景の中で立っているうちにいつの間にか内面に湧出してくる「哀しみ」の感情を思わせる。それは、

彼の中にあって何か彼を引き止めているものである。それをしも「禁欲」と呼ぶのは誇張であるとしても、詩人賢治の中に貫ぬいている感性の原則のようなものではあるまいか。

先に引いた〝十秒の恋〟の歌にも「かなし」があった。改めて見てみよう。

十秒の碧きひかりの去りたれば
かなしく
われはまた窓に向く

この「かなし」は、一連の恋の歌の中に置いてみれば、単に、去っていく愛しい人を求めきれないセンチメンタルで初々しい「悲し」のようにも解せるが、しかし、以上に見てきたような、彼の歌に印象的な「かなし」の延長上に位置づけることも可能であろう。するとそれは、愛しい人にそのまま自分の心を委ねてしまおうとしない、自分の禁欲への「哀し」のようでもある。

こうしてみると、彼の恋もまた、生命感の発露、異性への欲動と呼ぶには、それを抑える感性の自覚が余りに強すぎる。恋を高らかに謳おうとする歓喜・積極的欲求の姿勢が見られないのである。

(10)

世界を皮膚で感じることで、いつも世界の間近にいられることは詩人の特権であろう。しかしそのために、世界を征覇せんとする食や性の貪欲な野心から遠ざけられてしまう。賢治の「禁欲」とは、宗教心に基づくと解されることが主であり、それなりに妥当な解釈ではあるが、しかし一面で、詩人の必然的なあり方として理解することもできよう。それは、「欲」を「禁」ずるというネガティヴな意味あいよりも、受苦の人として宿命のひとつの生の積極的な(そして悲劇的でもありうる)あり方である。

それゆえに、賢治が「かなし」から離脱し、憂いなく歌にすべてを託すよう

になるためには、死による「禁欲」的感性からの解放が必要であった。死の2日前に書かれた、生涯最後の作品となった賢治の絶筆は次の2首である。

方十里稗貫のみかも
稲熟れてみ祭三日
　　そらはれわたる[61]

病(いたつき)のゆゑにもくちん
　　いのちなり
みのりに棄てば
　　うれしからまし[62]

これらの歌には歓喜への願望と祈りとが求心的に込められており、肉体ある限り引きずらざるを得なかった「かなし」の調子はない。

注

1) 賢治の初恋の事情については、儀府成一『宮沢賢治――その愛と性』(芸術生活社、昭47) p. 27ff. などが詳しく扱っている。
2) ちくま文庫版『宮沢賢治全集3』(筑摩書房、1986) p. 34
3) 同上書、p. 37
4) 同上書、p. 37
5) 同上書、p. 38
6) 同上書、p. 39
7) 同上書、p. 40
8) 同上書、p. 40
9) この女性については、儀府、前出書、p. 45 ff. 森荘已池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房、昭49) p. 209などが取り上げている。
10) 前出『全集3』p. 56

11) 同上書、p. 57
12) この女性については、森、前出書、p. 179 ff. を参照のこと。
13)、14) 森、前出書、p. 176 からの重引。
15) cf. 前出『全集 3』p. 469
16) cf. ちくま文庫版『宮沢賢治全集 8』(筑摩書房、1986) p. 230 ff.
17) cf. ちくま文庫版『宮沢賢治全集 6』(筑摩書房、1986) p. 60 ff.
18) 関登久也『宮沢賢治素描』(真日本社、昭22) p. 69
19) 同上書、p. 69
20) 堀尾青史「編年体・評伝宮沢賢治」(『國文學』昭59年 1 月号) p. 107 による。
21) ちくま文庫版『宮沢賢治全集 2』p. 137
22)、23) 森、前出書、p. 62 からの重引。
24) 藤原嘉藤治の回想では、「彼は絶えず女性を求めてゐた。だが決して単独に女性と会ふ事は欲しなかった。第三者の同座を願った。要らない誤解を受けたりして、周囲の人々に迷惑をかける事を嫌っていたのである」。——森、前出書、p. 187 からの重引。尤も、女嫌いと思わせる作品もあることについては、萩原孝雄「賢治のスタイルとイノセンス」(ジェイムズ　R・モリタ編『賢治奏鳴』有精堂、1988、所収) を参照のこと。
25) 関、前出書、p. 202
26) この女性については、関、同上書、pp. 202、205、及び儀府、前出書、p. 209 ff. を参照のこと。
27) 関、同上書、p. 202
28) 儀府、前出書、p. 269
29) 関、前出書、p. 148
30) 儀府、前出書、p. 190
31) 前出『全集 6』p. 530 からの重引。
32) 儀府、前出書、p. 111 からの重引。
33) 関、前出書、p. 200
34) 森、前出書、p. 67
35) 関、前出書、p. 149
36) cf. ちくま文庫版『宮沢賢治全集 1』(筑摩書房、1986) p. 29 ff.
37) 同上書、p. 38
38) 同上書、p. 100、傍点は引用者による。
39) 同上書、p. 33
40) ちがう立場からのこの詩についての解説が、弟清六によってなされている。cf. 宮澤

清六『兄のトランク』(筑摩書房、1987) p. 103 ff.

41) 前出『全集 1』p. 185

42) 三木成夫『胎児の世界』(中公新書、中央公論社、1983) p. 193

43)、44) 同上書、p. 194

45) cf. Aldous Huxley, *The Human Situation,* Triad/Granada, 1980, p. 142

46) 片桐ユズル編著『オルダス・ハクスリー=橋を架ける』(人文書院、1985) p. 172 からの重引。

47) この言葉は、このままの形では日本語版小泉節子「思い出の記」には見当らない。'I have a very thin skin.' は「思い出の記」の英訳者、Paul Kiyoshi Hisada による巧みな英訳であると思われる。cf. James Kirkup, *Hearn in my Heart,* 桐原書店、1985、p. 10

48)、49) 前出『全集 3』p. 16

50) 同上書、p. 17

51) 小野寺功『大地の哲学』(三一書房、1983) p. 25

52) 前出『全集 3』p. 26

53)、54) 同上書、p. 28

55) 同上書、p. 32

56) 同上書、p. 33

57) 同上書、p. 52

58) 同上書、p. 41

59) 同上書、p. 44

60) 同上書、p. 58

61) 同上書、p. 285

62) 同上書、p. 286

Summary

Kenji Miyazawa and Womanhood (II)

Masahiro Hamashita

〈On Kenji's Asceticism〉

Kenji's first love was when he was in hospital at 18. He loved a nurse who attended him, which inspired and led him to write some poems. This episode assures us that he also was an ordinary man who loves a young girl when he is young just as we do. But it is marvelous that since that first love he kept his chastity to his death and suppressed his sexual desires. His terrible asceticism was beyond our comprehension. It has been often said that his asceticism was due to his piety to religion. Of course this is partly true; but another reason is probably that he was by nature, a poet who is enormously sensitive. To be a poet means that he lives close to the universe, always feeling the delicate nuances of nature. He also is so sympathetic to everything around him, especially those people and animals and others that are very vulnerable and oppressed by the powerful, that he will naturally retire from struggle for food and the female sex. There was something sorrowful about Kenji, which prevents him from perfect enjoyment of nature and every human relationship including love affaires. Even in the case of his first love we can detect his restriction on fully active courtship, imposed by his natural sensitivity.